

令和5年度第1回二宮町施設一体型小中一貫教育校設置研究会

日時：令和5年6月12日（月）9：30～12：00

場所：町民センター3Aクラブ室

出席者：19名

原会長、山内副会長、池田会員、片岡会員、渡邊会員、宮戸会員、三好会員、村田会員、齋藤会員、和田会員、中西会員、北川会員、伊庭会員、藤田会員、岡野会員、杉本会員、野谷会員、森会員、渡辺会員

欠席者：4名

八幡会員、小林会員、協会員、藤原会員

オブザーバー：村田町長

傍聴者：なし

1. 開会

2. 教育長・町長挨拶

教育長：研究会は2年目に入りメンバーが変わり、新たにスタートした。また、にのみや学園が開校し、小中学校の先生方が連携し、工夫して歩みを一歩ずつ進めていることに感謝する。研究会では、この先の方向性を作っていただけたらと思う。

町長：メンバーが変わっていると思うが、昨年一年間の成果も共有して、一歩も二歩も前に進めていただきたい。

3. 自己紹介

4. 会長・副会長挨拶

会長：この研究会のコンセプトは、学校、家庭、地域の意見を施設一体型小中一貫教育に生かしていくこととしている。そして、提言書としてまとめて教育委員会へ提出し、その提言書を十二分に生かしていただくことになっている。

副会長：皆がフラットな関係の話し合いの場を持てればと思う。にのみや学園がスタートした年なので、力を合わせていきたいと思う。また会長をサポートしながら進めていこうと思う。

5. 協議

(1) 令和4年度報告と令和5年度の研究会について（資料1）（資料2）

- ・資料1については、今回詳細は取り扱わないのでお読みください。
- ・今年度は、設置時期、設置場所、校舎など具体的な話になってくる。統廃合への意見も伺っていく。また、いずれ施設一体型というが、時期はいつが適切なのか可能なのかを含めて考えていく必要がある。
- ・将来の学校づくりに学校、地域、保護者の考え方、意見、希望などを多く集める

年になるので、次回お願いすることだが、皆さんの立場で周辺の意見をまとめてきてほしい。

- ・教育委員会にも考え方、意見、見通しを話してもらおうようになる。

意見

→なし

(2) 二宮町小中学生アンケート結果より (資料3)

- ・各自で読んだ後、校長先生から実際の児童生徒の姿について話してもらいたい。

【二宮小】

- ・中学校に入る時に楽しみしていることもあるが、不安に思うこともあり、部活や学習、先輩との関わりなどについて、少しでも不安を解消することが大事かと思う。中学校に足を運んで中学生の姿を見たり、中学生から話を聞く機会を持ったりして、中学校への段差を低くしていく必要がある。中学校生活を円滑に進めていくうえで、また小中一貫を考えていくうえで、小中の関わりの機会を多く持つていくことが大事だろうと思う。

【一色小】

- ・小学生は1年学年が上がるだけで嬉しさや喜びがあると思うが、6年生が中学校に進学するというのは気持ちの面で大きいかなと思う。
- ・不安に感じていることの中に、上級生との関わりとあるが、本校は人数が少なく、さらに中学は二校に分かれるので、少人数への不安を抱えながら進学している。でも進学した後の話を聞くと、それほど心配はないようである。期待や不安を分かたううえで、これから考えなければいけないのかなと思う。

【山西小】

- ・アンケート実施時期がコロナの最中もあって、世の中の不安が多少は影響しているのではと思う。
- ・最近の大きな行事として運動会がある。二宮小とは地域柄が違うので一概に比較できないが、よく行事は高学年を主体に作るといいものができると言われていて、まさに理想的な形で5、6年生がやる気をだして盛り上がった運動会だった。コロナが5類となって初めての全校での運動会だったが、以前のようにとはなりきれていなかった。

【二宮中】

- ・夏から秋にかけて中学3年生は一人ひとり校長と面談をした。そのときに「30年後の自分像を教えてください」という質問をした。そうすると、「一定の収入があって楽しく暮らしたい」といった安定志向が非常に強い回答だった。
- ・中一ギャップについて、中学校の教員が小学校の状態を知ることが大切で、それを踏まえて中学校ができることは何かを考える。

例えば、中学1年生の中間テストへの不安を解消できないかと思い、プレ定期テストを用意して、1時間の中で3教科のテストを実施した。

【二宮西中】

- ・アンケートの結果はその通りだと思う。施設一体型だと遠い未来のことで、我々は今分離型が始まったばかりで、多くの生徒、教員、保護者が手ごたえやメリット感をまだ感じていない。二宮町の小中一貫教育はこうだよというものがまだない。分離型である以上ハードルが高いので、メリット感について皆さんから意見いただきたい。子どもたちが親になった頃には施設一体型になっているのだろうと思う。それを踏まえたときに、どうやったら二宮で生きていることを実感させられるかを考えたいと思う。

会長：特に学校の人数の違いは今後話題にしたいと思っている。また、高学年が主体になってどのようなことができるか、これは小中一貫校の良さにつながっていくと思う。二宮中学校の取り組みは参考になりました。メリット感をどこに感じられるのかについては、他校の実践例を参考にしながら、分離型を進めていけば、それが施設一体型につながり、今子どもたちが持っている課題に若干なりとも対応していけるだろうという視点で、このあとの議論をしていただければと思う。そして、施設一体型はいつになるのかということについては、そう遠くない時期を見据えてこの研究会をやっている。

意見

会員：アンケート結果を見て、小学校から中学校への不安は、授業や先輩、部活動の他に、新たに先生との関わりもあると感じている。今年中学1年の息子を見てみると、小学校の先生たちの授業の風景や内容と、中学校の先生たちの授業のやり方に離れ感があるなど感じる。先生方の交流がもっとあったらよいと思った。

会長：このあと分離型で生かして行ってほしいこと、実践してほしいことで触れようと思う。

会員：このアンケート結果が統計的に正しい分析をされているのか。また、分析結果の5つの項目のうち4つの項目で、男女の差について言及されていて、この結果は興味深く二宮町の強みになると思うが、本来は男女の差を均等にすべきだと思う。

会長：だいたいこのような傾向として読み取れるなどということで見たい。また、男女の記述については、自尊感情に関わってくる。ジェンダー、自尊感情、アイデンティティなどひっくるめて、二宮の子どもたちが生き生きと自分を発揮していくということでまとめさせていただいた。

会員：二宮小と山西小の違いは何か。

会員：物理的に自然が豊か、児童数が半分、職員の年齢構成が違う。PTA 会員でない人がいるなど。

会員：会長のまとめや校長先生方の話は最もだと思うが、夢や希望が持ちにくくなったとか、授業の理解度が低くなっているということの根本調査はしないのか。

会長：調査という形ではしていない。昨年度、この会議の中で子どもたちの課題は何か、求められる姿は何かという話し合いをした。なぜこうなったのかは出てきている。後ほど資料4の中でも扱うが、学校だけではなく地域も絡んでの姿やあるいは意識が重要であると出てきている。

会員：この会は、ワークショップのように私のような一般の保護者が意見を述べていいか。そのうえで言わせていただくと、民間企業であれば根本原因から解決する。うわべだけでなく、早めに根本を出していくのが大事かなと思う。

会長：推進の計画の中で、この会の役割の一つとして、できるだけ多くのデータが必要になるので意見交換会の開催も書かれている。できるだけたくさんの意見を聞いていき、そこから必要であれば議論していく。

会員：二宮の地域性を発見してマイナスなことは改善し、二宮らしい教育をしていくことが必要かと思う。

会長：昨年度この研究会で講演をいただいた小松先生からは、二宮の強みを生かした学校づくりをしなさいとアドバイスをいただいた。その時聞かれたのは、「二宮町にはどれくらい外国人が住んでいるのか」。二宮町がどういった構成になっていて、どんな産業があって、どんな人が生活しているのか、そういった地域性を出し合って、地域の方からの視点で見なければいけないと思う。

会員：分離型のメリットを一般には感じられないとか、共感しながらどうなるのかなということについては、皆さんに分離型でのメリットが感じられないのは事実。それをなくすために学校を中心に努力してきている。町の予算として100万前後後補充がある。また、4月の教育委員会の定例会で話題になったが、どの段階で子ども同士、教員同士の交流を、校長や研究会が中心となって早い段階で具体的に方針を決めてやっていくことを考えてほしい。

会長：地域・保護者の皆さんからもご意見いただきたいと思う。

(3) 9年間でめざす子ども像と学校・家庭・地域の役割(資料4)【グループワーク】

- ・学校・家庭・地域の役割について話し合ってもらいたい。

【A班】

- ・5校が一つにならないといけない理由は何だろうか。各学校の特性は素晴らしいのに、一つにする理由はあるのかという疑問が出た。
- ・教育長からは、町は目指す子ども像として「認め合い、高めあう、二宮の子」を掲げてきていて、例えば、「どうして挨拶しないといけないか」ということについて、挨拶することでコミュニケーションが始まり、相手を認め、自分はこうですよ自分を出していく力をつけるために必要であるといった話があった。

- ・各学校の地域の良さを取り入れ、また無くさないようにしながら、しかも6歳から15歳、特に15歳の子どもたちにこのような力をつけてほしいといった二宮の一貫した教育を、皆で共有して、そこに向かっていかなければいけないという意見があった。

【B班】

- ・子どもにとっては小中学校の義務教育の9年間だけじゃない。子どもにとって不安は付きまとう、その不安を解消・軽減していくものが必要ではないかという話から議論が始まった。
- ・資料4の2の①「学校・家庭・地域での基本として」にある項目を一つ一つ大人が実践するのは難しいことだが、「家庭で親としてできていますか?」「学校で教師としてできていますか?」と問い続けていき、大人たちが実践し学び続けていくことで、子どもが安心して生きていける。不安はあるけど何があっても大丈夫、自分で自分の人生は生きていけるし、自分で決めて選んでいける。
例えば、校則というものがあつたら、校則を守るとか守らないではなく、校則を変えていく、工夫する、自分の中で捉え方を置き換えるなど、自分の中で核となるものを持っていると、子どもたちは生き生きと、その先15年先までも生きていける力になっていくのではないかという話が出た。
- ・また少し先の姿を見せていく。小中一貫教育に置き換えると、2、3年先のお兄さんお姉さんの姿を見せることで不安軽減になっていくと思う。色々な人がいて、色々な考え方、色々な人生の作り方があるなということに繋げていく。
- ・自分の核みたいなものを育てていくことと、少し先の見通しが見えていると、不安は軽減されるのではないか。それを学校・家庭・地域が連携していくとよいのではないかという話が出た。

【C班】

- ・異学年交流について、コロナが収束してきて、小学校では縦割り班での活動を通して異学年交流や上学年から学ぶ機会がある。中学校では委員会や部活動が異学年交流や先輩から学ぶ機会となるので、学校での活動を充実していく必要がある。
- ・中学校では、言葉遣いや挨拶について、先輩から学び自然と身につけていく。
- ・あえて1年生と6年生の教室を同じフロアにすると、自然と異学年の様子を学べ、交流に結びついていくと思う。
- ・小中の児童生徒の交流について、部活動見学・体験や総合的な学習の時間を通して、中学校の取り組みを知ることの大切さがある。大事にしていきたい。
- ・小中の指導の違いがある。中学校の教員が小学校を見に行くことが大事だろう。その逆も当然あると思う。小中一貫のカリキュラムとか、教科ごとの研究をしているが、指導感というのか、子どもたちに対してどのように指導して、中学校に行くのかということを経験者が理解しておく必要がある。

(4) 分離型小中一貫教育校視察報告と取り組み事例について(資料5)(資料6)

○三鷹市おおさわ学園視察報告(資料5)

- ・三鷹市の小中一貫教育校は、一つの中学校に対し2, 3校の小学校がぶら下がり7つのグループがある。
- ・基本的な特徴として、既存の小中学校を存続させ、コミュニティ・スクールを基盤とした一貫したカリキュラムに取り組んでいる。
- ・カリキュラムは、小学校から中一のつなぎを、できるだけ滑らかにすることに注力している。
- ・違う学園の例だが、各小中学校の特徴は違ったそうですが、揃えて一貫教育校の骨組みを構成した。
- ・特に、小学校で体験する内容をできるだけ揃えるようにした。小学校の行事をできるだけ年間で揃えて、同じ経験をしたうえで、同じ中学校に進学する。
- ・教員の乗り入れ授業について、どの時間にどちらの学校に行くのか。小学校の授業時間45分と中学校50分の5分の差を上手く使って、行くタイミングを工夫した。
- ・乗り入れ授業の予算では、H28年度では三鷹市全体で2,200万円ほど、一つのグループあたり300万少しの予算、一つの学校あたり100万ほどの予算を確保している。
- ・先生方全員に兼務発令をしている。小中学校両方の教員ですよとなっている。
- ・学力も不登校の出現率も開園を境に変化している。
- ・定量的に評価する目的の一つは、地域の人に理解してもらい、学校の中の様子を伝えるために行っている。p20は保護者による学校評価の得点で、こういったことを通じて地域への理解度を深めるということを行っている。
- ・代表的な写真として二つ。子どもたちの交流を大事にしている。また中学生が小学校に出向いて行って、こどもたちが交流することが小中一貫ですよとのこと。ひと月に何回かと回数に限られているので、それをいかに充実させるかが課題とのこと。
- ・補足として、3年前に京都の大原学園を視察し、乗り入れ授業を見た。中学校の理科の授業で、後ろにいた小学校の教員は、出遅れている子や理解が進まない子、実験器具の使い方が分からない子を支えていくというスタイルで進めていく授業を見た。小中学校の教員が一つの教室にいるという姿を体験させてもらった。

意見

- ・兼務発令について、本来は小学校の教員は中学校では教えられないが、教育委員会が認めたということ。
- ・兼務で給与は変わるのか?
→変わらない。
- ・おおさわ学園は、コミュニティ・スクールを前提としているということだが、二宮

町の小中一貫の議論の中で、コミュニティ・スクールをどう捉えていくか、今後の課題となるか。

→はい。小中を一緒にする意義ではないかという意見もあるので、今後考えていくことになる。

○施設分離型小中一貫教育校の取り組み事例（資料6）

- ・分離型が始まったが、今後どういうことをやってほしいか話し合っしてほしい。

【A班】

- ・一色小学校が二宮中と二宮西中に分かれて進学するという課題に対する今後の方針が見えず不安が持続してしまっている。
- ・学校、家庭、地域が一つになるためにはどうしたらよいか。地域には熱い思いを持った人がいて、地域がどのように学校に役立っているのか。それぞれがそれぞれの場所で活動をしているけれど、一つのテーブルを囲んで熟議する場がないので、必要を感じる。また学校運営協議会長情報交換会というものがあり、各校の状況を報告しあう機会があるのでその活用と、そのような場を増やしていただきたい。

【B班】

- ・分離型ながらにして「にのみや学園」の実感が沸くような工夫、例えば体育祭を5校合同でやるなど、何か一つでもいいので一緒にやる経験をしたらよいのではないかな。
- ・中一ギャップとして、学習、部活、先輩という話が出ているが、子どもたちの声で先生というのもあるので、先生の指導の違い、子どもたちの扱い方の違いについても感じて運営していただきたい。

【C班】

- ・各学校に小中一貫教育のコーディネーターの教員がいて、アイデアを出しあっている。昨年度、中学校の生徒会が小学校6年生に向けて、中学校はそういう所だよと話をした。今後こういった機会は増えていくだろう。
- ・令和6年1月に一色小が行う芸術鑑賞会に、二宮小と山西小の6年生にも声を掛けていただき参加する計画がある。
- ・中学校では、中郡の生徒会メンバーで行うリーダー研修会が復活する。横のつながりがある。
- ・夏休みに、西中生徒が山西小学校の学童に顔を出すことを計画している。
- ・小学校3校の6年生が、8月5日の「ガラスのうさぎ像平和と友情のつどい」に集まる。
- ・これらをやってみると、横のつながりの候補が見えてくるのではないかなと思う。

意見

- ・おおさわ学園のいい事例があるので、すぐに実施すればよいと思うが、実施する上

で、何が障害になっているのか。

→先生たちは授業を持っているので、やるぞと動けばできると思う。各学校間で予定を突き合せていけばできると思う。小中の先生の交流は昨年度もやっている。

・予算措置ですか？人手ですか？

→人手です。

・このメンバーで協力できることはないですか。机上の空論で一年過ぎてしまう。今年度実施したい。

→乗り入れについては、後補充の教員の手配をしている。どのくらいの時間数かは、予算の範囲内となるが、学校の中で研究授業するための後補充の予算はある。また兼務発令については、教員が移動した時に何かあった時は、移動した先の校長に責任がある。移動元の校長が責任をもって移動・出張させているので、兼務発令しなくても乗り入れはできる。

会長：分離型だと障害はある。移動の問題や学校運営協議会はどうするか、PTA 活動はどうするのか。地域、保護者の皆さんでやっていけることもある。

学校の先生に対する子どもたちの考え方、受け止め方に事例がないので、そこに心配があると思う。中学校の先生と小学校の子どもたちとの交流をどうやって作っていくかも課題になる。

あくまでも施設一体型のための助走であるということで、分離型でやっていく間に一体型に向けてできることをやっていきたいというのが本日の結論となる。

副会長からもありましたが、こういった様々な立場の方が集まることが大切だと思う。

6. 閉会